

埼玉の夜明け

第50巻
第1号
通算154号

日本キリスト教団
関東教区委員
社会委員会

誌上 耕論

選挙の季節に願ひごと

和戸教会 大下 仁

間もなく参議院選挙のときが巡ってきます。この稿を準備している五月では、衆参同時選挙の可能性が取り沙汰されています。いずれにしても選挙の結果が、今後の日本の進む方向を決める重要な意味を持ちます。今度の選挙の争点は、改憲問題を中心に、沖縄の基地問題、領土や防衛などの安全保障問題、アベノミクスなどの経済・財政問題等多岐にわたると見られます。安倍政権の支持率は、比較的高く、首相も相当の自信を持っておりようですが、それが傲慢となり、暴走する危険性も高

まっています。わたしたち選挙民は、一票の重みを自覚して、候補者一人ひとりの政策を十分に検討し、政治家としての資質を問いつつ投票したいと思えます。与野党の現状を見る時、私たちにあって、厳しい結果も覚悟しなければなりません。しかし、議会制民主主義は、選挙による民意の表現に依拠するものである以上、その結果の如何によらず、私たちがその責任の一端を担わなければならない面があります。その事を冷静に踏まえた上で、なお人口の〇・八三パーセントを占めるだけの日本のキリスト者は、少数でも、「見張りの務め」を求められています。私たちは、いつでも、政治家が人々のために良い政治を行うよう祈り続ける者です。しかし、ひ

とたび社会を誤った方向へ導いていこうとするとき、良心に従って明確に「ノー」と言うことを心に留める必要があります。

さて、国政選挙に際し、選ばれた政治家、また行政に携わる方々に、二点要望したいと思えます。第一に、若い世代が希望を持って生きていける社会づくりのビジョンを積極的に打ち出して頂きたいという事。現在は、大卒や高卒の求人倍率は高く、これから仕事の世界に入ろうとする若者の選択の幅が広い事は好ましい事です。しかし一方で、一九九〇年代からの「失われた二十年」の日本社会は、自己責任、自助努力の標語のもとに、人々を競争に駆り立てた社会でありました。そしてその競争は、初めから「勝ち組」と「負け組」を作り出すようなものであったのではないのでしょうか。ブラック企業、過労死、コミュニケーションなどの様々な単語も飛び交いました。現在までもその痛みを負っている人達があります。そうした課題を解決に向かわせ、若い世代が希望を育み、成長していける社会の実現に尽力してほしいと思えます。第二に、弱い立場にある人たち、小さくされている方々に暖かい政治を実現して頂きたい事です。政治家の使命は、弱さの中にある人々が、人間として、尊厳を

持つて生きられる社会の仕組みを作り上げていく事だと思えます。今、少子高齢社会を迎え、若い世代からは、国の高齢者優遇政策による「世代間格差」に対する怨嗟の声が聞こえてきます。「嫌老社会化」への懸念すら生じています。こうした時、政治家は、世代間の対立を政策的に解消し、老若を問わず、病弱であったり、障害を持つていても、誰でもが生き生きと生きられる仕組み作りに取り組んでほしいものです。

この季節、主が、「隣人を自分のように愛しなさい」(マタイによる福音書二二章三九節)といわれた言葉の「重み」を、もう一度かみしめたいと思えます。目まぐるしく変化する時代にあつて、私たちは、イエスがそうであつたように、愛と平和を求め、聖書に基準を置き、ユーモアを忘れずに物事を捉え、判断していきたいと思えます。

平和を作るために

草加教会 佐竹 昱子

私は今から五一年前の一九六八年に一期生として聖路加看護大学を二二歳で卒業した。多摩全生園で働きたいと先輩の総婦長を訪れ

た。銀座の喫茶店で「先ずは臨床で経験を積み、気持ちが変わらなかつたらいらつしやい。」と論された。かくして聖路加国際病院に就職したのである。当時、看護の東大と謂われていた病院の労働実態はすこぶる劣悪であった。私は改革をするべく、以来定年までの三八年間を過酷な勤務と労働組合運動に明け暮れた。

病院の入り口に「神の愛のため」と書かれた石碑があり、その周囲八ヶ所には止め具の穴があつた。私は通りかかった日野原重明先生に臆面も無く訳を聞いた。先生は「戦争中、天皇こそが神であると軍部の命令で鉄板で蓋をさせられた時の鉄の跡ですよ。」というのであつた。そう言われてみると古いカルテに「大東亜病院」というのがあり、戦争中みたいな名前だと思つたことがある。もう一つ忘れられないことがある。ベッドの上の姓名と保険証の名前がちがう方がいらした。その頃の私は戦争について全く無知であつた。我が国が朝鮮半島を植民地支配し、宮城遥拝・創氏改名を強制し、土地・財産そして言語さえ奪つていたこと。日本での差別についても知らず、「なぜ堂々と本名を名のらないのだろう。」と思うばかりの愚かさであつた。私は終戦の年に生まれた平和の

申し子だと自負している。しかし、近現代史は学校で教えられず、無知のまま年を重ねてきた。自国が近隣諸国を侵略した歴史を教育しない日本では真実を知るために自助努力あるのみだ。無知は恥ではなく罪だと思ふ。いま人生を折返し、あわてて勉強をしているが、とても時間が足りない。膨大な本を前にして、読み切れるのは僅かである。講演会・フイー

ルドワークなどへの参加は多分に自己満足だ。
戦後一三年、入学した中学校の職員室の廊下には模造紙に書かれた国連憲章が掲示されていた。それを讀んだ時「もう私が生きる時代に戦争が無いのだ。」という感慨をもったことを鮮明に覚えている。しかしその後の世界はどうだろう。戦争や争い事が途絶えることは無い。殊にいま我が国は七

〇年以上前に歴史の針を戻させようとしている。政権党はマスコミを取り込み、福祉後退も戦備増強も仕方ないと意識を誘導している。国民を老人と若者に分断し、「もっと厳しい国もあるからまだましかもしれない。」と諦めさせられている。歴史を平和を築く方向へ舵をきりかえなければならぬ。イエス様が今ここにいらしたらどうされるだろう。

主張

「天皇制」という

脅威の文化システム

二〇一九年五月一日より、元号が変わり、代替りが行われる。これは先帝の崩御という形ではなく、生前讓位である。この「令和」は、日本最初の元号「大化」から二四八番目に当たるといふ。出典は歴史続いてきた中国古典（漢籍）ではなく「万葉集」で、元号の漢字を日本の古典（国書）から採用したのは初めてだそう。しかし、「万葉集」の歌は「文選」など漢籍の教養が元になっているのだ。「文選」は漢籍であり、日本には漢字文化圏の文化と教養が残っているのに、政府は何故国書を強調するのか。

これから、国事行為、皇室行事、内閣行事が行われ、国民は何も知らずに宗教的儀式に参加していくのである。特に新嘗の祭りに由来する大嘗祭は、古事記や日本書紀において、皇祖天照大神が新嘗の祭りが行われたことや上古の天皇が新嘗の祭りを行ったことが記述されており、その起源は、これらの歴史書が編纂された奈良時代以前にまで

遡る。第四〇代天武天皇の時に、初めて大嘗祭と新嘗祭が区別され、爾来、大嘗祭は一世一代の特別に行われる新嘗祭として極めて重要な皇位継承儀式とされ、歴代天皇は、即位後必ずそれを行うことが皇室の伝統となった。これは天皇が即位後初めて、大嘗宮において、新穀を皇祖及び天神地祇にお供えし、自ら食し、「安寧」と「五穀豊穰」を国家・国民のために祈念する儀式であるという。天皇の本来の務めは、皇室神道の祭司であり、天皇は天照大神の直系であり、天照大神の霊を宿した「神」とされている。これは日本の皇室とイギリスの王室家族の類比で分かる。英国国教会では国王が首長ではあるが、一信徒であって神ではないのに対し、天皇は皇室神道の祭司であり、神でもある。問題なのは、この神の皇室行事に国が関与することにある。「令和」の元号、「天皇制」ともに、多くの国民の気持ちやまとめたり、一つの方向に導いたりできることである。私たちは、この日本の文化と伝統を嚆呑みにせず、「考え続けたい」ことが必要であり、「提灯行列」「万歳」を真摯に考えなければならぬ。

灰谷健次郎が「うさぎの目」の中で日本の植民地時代の朝鮮の人々の抵抗を描いている。極限状況の人間の魂を「抵抗ほど美しいものは無い」と伝えている。日本人の抵抗の遺伝子はどこへ行ったのだろうか。フランス革命より一五〇年以上も前、一七世紀の日本では百姓一揆が千数百件もあったという。命がけて民百姓のために立ち上がった庄屋や名主がいたが、家族ともども打首にされている。「友のために生命を捨てること、これ以上に大きな愛はない」。自己犠牲に生きた人々がいたことに胸ちぎれる想いである。

静かに微笑む姿は美しいが、私の信条は「闘わないと幸福にならない。」である。学ばほど人間の愚かさや崇高さをつきつけられる。勇気をもって伝えよう、訴えよう。失うものは何も無い。イエスが傍にいてくださると信じ、平和を作り育てる道を歩みたい。

素人の視点から

浦和東教会牧師 永井三三男

く、協力委員でもなく、一年間の社会活動委員としてです。前回は浦和東教会に着任した一三年前、一期二年間社会委員をさせていただきました。

今回はその時以来となります。外野から、社会委員会の活動を拝見していると、一三年前から大きな変化はないように感じられました。先日、先日の社会委員会に出席した時も、同じ印象を持ちました。

こうした社会問題に熱心な人たちが、熱い思いで活動している。時によっては深い知識や埼玉地区の歴史的背景が語られたり、議論がなされます。

さて、私の教会はといえば、社会委員会なるものがあります。年数回委員会が開催されます。主たる活動は、八月第一日の平和聖日の取り扱いと、当日午後の持ち方についてと、昨年は行いませんでしたが、山谷へ献品をお届けすることです。

平和聖日礼拝では、この日だけ、第二次大戦下における日本基督教団の責任についての告白を牧師が朗読します。私が一八年在職していた教会では読みませんでしたので、正直驚きました。午後は戦争体験者のお話を伺うことが多くありました。

ただ、こうした体験を語ってくださる方も少なくなってきましたので、今年はどうです。

この他に、社会委員会主導とい

今年度久しぶりに社会委員会にかかわらせていただくことになりました。とは言っても、社会委員ではな

うわけではありませんが、婦人会・壮年会合同の会で環境問題、憲法について発題があり、意見を交換するということもあり。この意見、立場が正しいといった、結論は出さないようにしています。教会には多様な意見、考えがあり、それを大切にしたいの思いからです。

説教はと言えば、平和聖日には所謂社会問題を意識した主題説教となりますが、ほかの主日は、聖書テキストにとって必要と思えば語り、そうでなければ語らない、まあ、自然体といったところでしょうか。

さて話を地区社会委員会に戻すと、社会委員会の熱心さと地区全体の思いに温度差があるように思われます（あくまで個人の感想です（笑））。そのことは、委員会の発信する「埼玉の夜明け」の文章が、やや熱心、熱すぎ？、ともすると、あれは好きな人たちがやっていることで、私たちには関係ない、ついていけないという思いを与えてしまっているように感じられます。社会問題は、キリスト者にとって大切なことです、それゆえにその取扱いにも慎重さも求められるのではないか、と思えます。

活動委員としての私に、ついていけないと思わせないような地区社会委員会だといいなあ。素人の視点からでした。

書評

六人の牧師による

「天皇代替わり」への

問題提起の書

所沢みくに教会 稲 正樹

「教会と政治」フォーラム編『キリスト者から見る〈天皇の代替わり〉』（いのちのことば社、二〇一九年五月、一四〇〇円＋税）

本書は、二〇一七年三月に発足した「教会と政治」フォーラムのメンバーが執筆した、三〇年前の「天皇代替わり」に比べて静かすぎるキリスト教界に対する、問題提起の書である。

本書は、以下の各章からなっている。

第一章（山口陽一）「キリスト教と天皇制―天皇の代替わりに備えて」は、戦前日本の教会の陥った偶像礼拝と戦争協力の罪責の具象を指摘しており、教会の負の歴史を学ぶことができる。キリスト教会が天皇の神格化には否を言うことの肝要さを、述べている。

第二章（城倉啓）「聖書・憲法・天皇制」は、憲法改正によって立憲君主制を廃止するのが筋だとしていいる。

第三章（柴田智悦）「天皇の生前退位」は、天皇代替わり儀式に

は政教分離違反と信教の自由の侵害があると指摘している。大嘗祭は十戒の第一戒、第二戒に反しており、イエス・キリストのみを主と告白する決意を新たにしていることと呼びかけている。

第四章（朝岡勝）「元号問題とキリスト者の歴史観」は、天皇制の歴史観に対して、聖書に基づくキリスト者の歴史観を論じている。改元によって歴史を支配し、リセットするのが前者、主イエス・キリストの時間支配と歴史支配を告白するものが後者である。

第五章（星出卓也）「伊勢神宮と政教分離」は、明治維新から現在までの伊勢神宮の変容をトレースし、伊勢神宮が日本の繁栄を求める信仰と文化に他ならないことを別決して、日本の地で福音宣教をするものの覚悟を述べている。伊勢神宮問題の分かりやすいガイドにもなっている。

第六章（弓矢健児）「私たちの信教の自由―天皇代替わりに対して私たちはどのように向き合うか」は、教会とキリスト者がなすべきこととして、信教の自由・政教分離を守るための闘い、天皇制・神道を相対化させる取り組み、皇室（天皇制）の民営化を進めるの三点を提起している。

この世界の最も小さな者の一人のために愛をもって支え、平和を実現していく奉仕（弓矢牧師の弁）と、日々の生活の中で信仰に

基づく実践と日本の国家と社会の変革を進めていくことの大切さを願っているすべてのキリスト者に、ぜひ本書の一読を勧めたい。

二〇一九年度社会委員会方針

社会委員長 本間 一秀

今年度も前年度に引き続き社会委員会の責務を担うことになりました。ご指導、ご協力よろしくお願ひします。

無責任な政府の姿勢により、政治不信は相も変わらず続いています。平和憲法が蔑ろにされ、改憲への動きが止みません。沖縄の辺野古の海は埋め立てられ、戦争への備えが為され、「人殺しのお手伝いをさせられている」沖縄の人々の苦悩、差別は余りにも悲しい状況です。原発を推進しようとする政治家、それに賛同する人々。私達の生命の危機、環境汚染への恐怖への思いには無関心、あまりにも愛の無い社会状況ではないでしょうか。

昨年九月、関東教区社会活動協議会に参加し、足尾鋇毒事件の学びを深めました。足尾の山々は緑化が進み、キツネや熊が生息するようになりつつあります。しかし、植林を進めたくても「立ち入り禁止」との企業の圧力で緑化が進まない現実があります。また鋇毒の

沈殿池の堤防が東日本震災時には崩落し、毒混じりの汚泥が渡良瀬川に流出した事例等もあるのです。足尾銅山鋇毒事件は明治政府が推進した富国強兵の「産物」です。「戦争して国を繁栄させる」暴挙の果てとも言える鋇毒被害の悲劇は今も続いているのです。神様から与えられた「美しい大地」、宣教の地が汚されているのです。私達は無関心であってはならないと思います。

また部落差別やヘイトスピーチ問題、性差別問題は胸が痛くなる思いです。こうした事柄に対し、どのように考え、行動に移すべきなのか、真の平和を祈り求める「キリスト者である」私たちひとりひとりが大きく問われているのです。

様々な力により社会の中のあらゆるところで、権力に押しつぶされ、差別され苦しむ方々が何と多いことでしょうか。教団の内部でも、人権侵害、差別が起きているのです。組織崩壊が始まっているのです。「社会問題を蔑ろにする」傾向にあることも事実です。「世の為の教会」であるべきです。

私達は心から主を賛美し、み言葉に聞き続け、主の福音を語り続けて行きましょう。御栄を現して参りましょう。「小さき者、重荷を負う者」の為に生きるのが信仰者、教会ではないでしょうか。主イエスの歩みに従って、私達社会

委員会は次の様な活動をします。地の塩、世の光としての教会を社会を守るべく、見張りの役を果たして参ります。諸教会の皆様のお祈りとご理解ご協力をお願いします。

社会委員会報告

◎第一回社会委員会

日時・四月一四日
午後三時一〇分～六時
場所・川口教会 出席者一〇名

協議

●本年度委員

教職・本間 一秀(川口)

栗原 清

(地区委員・武蔵豊岡)

その後、大坪 直史(熊倉)に交代

第二〇回平和を求める

八・一五集会のご案内

日時・八月一五(木) 一〇時～

会場・大宮教会

演題・「安倍改憲は国家と社会をどう変えるか」

『四項目改憲』の危険性

講師・永山 茂樹氏

(東海大学教授)

信徒・阿部 孝司(上尾合同)

稲 正樹(所沢みくに)

大下 仁(和戸)

佐竹 昱子(草加)

沼田 祐子(埼玉大通り)

協力委員

浅子 和夫(和戸)

井川 明(川口)

岩井田慎二(埼玉和光)

(その後逝去された)

●組織

委員長・本間 一秀

書記・井川 明

会計・大下 仁

「さいたまの夜明け」編集担当...

稲 正樹、井川 明、

佐竹 昱子

委員・浅子 和夫

阿部 孝司

稲 正樹

佐竹 昱子

沼田 祐子

大坪 直史(地区委員)

●社会活動委員

依頼要請に応じて、以下の皆様が本年度の社会活動委員に就任した。

教職・永井 二三男(浦和東)

信徒・相島 邦之(大宮)

柿沼 聖子(加須)

廣瀬 文朗(埼玉和光)

●主な活動の柱

平和と天皇制問題

部落差別問題と人権問題
環境問題

●本年度の主な活動予定

(1)第一回社会委員会

四月一四日(日)川口教会

議案・本年度社会委員会組織等

(2)第一回社会活動委員会及び第二回社会委員会

六月三〇日(日)埼玉大通り教会

内容・埼玉地区社会委員会、社会活動委員会の歴史、「埼玉の夜明け」について遠藤富寿先生の

発題と分かち合い

(3)平和を求める八・一五集会

八月一五日(木)大宮教会

テーマ・「安倍改憲は国家と社会をどう変えるか」『四項目改憲』の危険性」講師永山茂樹氏

引き続き第三回社会委員会

(4)環境問題講演会

一〇月一三日(日)埼玉大通り教会

テーマ、講師とも未定

(5)第二回社会活動委員会及び第四回社会委員会

十一月一〇日(日)川口教会

内容・各教会の社会活動報告等

(6)第五回社会委員会

二〇二〇年一月一九日(日)

内容・本年度のまとめと新年度に備えて等

(7)信教の自由と平和を求める二・一集会

二〇二〇年二月一一日(火)大宮教会

テーマ、講師とも未定

◎第一回社会活動委員会・第二回社会委員会

日時・六月三〇日

午後三時四〇分～六時五〇分

場所・埼玉大通り教会 出席者一二名

議事

(1)埼玉大通り教会社会委員会の皆さんとの打ち合わせ

(2)埼玉地区社会委員会、社会活動委員会の歴史、「埼玉の夜明け」について。

発題・遠藤富寿先生

協議

第一号議案 二〇一九年四月一四日(日)第一回社会委員会議事録承認の件

本件につき、出席委員全員異議なく、承認した。

第二号議案 平和を求める八・一五集会の件

第三号議案 環境問題講演会の件：埼玉大通り教会と協賛

一〇月一三日(日)午後三時～五時三〇分(茶話会含む)

講師・篠原弘典氏(東北教区放射能問題支援対策室)のみやぎ脱原発・風の会代表

テーマは今後確認する。

第四号議案 その他の計画の件

第五号議案 埼玉の夜明け本年度第二号の件

編集後記

「埼玉の夜明け」は今年で五〇巻を迎えます。本号の「誌上耕論」は今年度より新たに社会委員になった二名の方と社会活動委員になった一名の方に寄稿いただきました。次号では、新たに社会活動委員に就任された方の原稿を掲載する予定です。本誌が、教会と社会、教職と信徒のよきフォーラムとなることを願います。(稲)

